

# 社会主义中国の宗教政策

## —抄訳『中国社会主义時期の宗教問題』その二—

永井政之

### はじめに

一九八九年六月四日は、天安門事件のあった日として、現代中国に関心を寄せる者に忘れ難い日となつた。その政治的な結束がどうなるのか予想もできないが、ともかくかの事件以後、「自由」が、文字通りの「自由」ではなく、「限られた」

ものであることはより鮮明となつた。政治思想の学習会が各単位で頻繁に行われていることはマスコミの報道のとおりであろう。

とすると、この小論で採り上げている「宗教政策」はどうなのであらうか。八月末、筆者は一年ぶりで上海社会科学院宗教研究所を訪問した。高振農氏をはじめとした諸先生との話、また陳耀庭氏の案内を受けての上海市内の白雲觀訪問など総合すれば、少なくとも表面的にみれば、事件の以前も以後も、庶民と宗教との関係は不变であるように見える。実際、上海でのデモに参加した某氏によれば、「汚職追放とベ

ースアップを要求して参加した」というから、日本で捉える

そこには北京と上海という地域差、あるいは民主化運動を指導した人々と庶民との意識の差などが多面的に表われているとも言えよう。

ともかく、そのような現状の中で、社会主义中国の宗教政策がどのようにカジ取りされていくのか皆目見当がつかないというのが本音である。にもかかわらず、あえて天安門事件以前に成った本書の抄訳を、『紀要』に連載しようとするのは、やはり、ある時点での宗教政策を確認しておきたいという気持ちからであり、いま一つは、政治思想の学習が強化されたにしても、それが直接的に宗教弾圧という形にまでは至るまいという予想からである。再三言つてきたように、現代中国では、政治の方向を左右するほど、宗教が力を持つてい

るわけではない。

本編は『紀要』前号で抄訳した『中国社会主義時期の宗教問題』の「付録」の部分の続きである。前回は仏教が中心になつたが、今回は道教、キリスト教、である。仏教学部の紀要に、仏教以外の宗教を対象とした論文を紹介することには躊躇をおぼえるが、よくよく読んでいくと、中国人が宗教を受容するとき、一つには民族という固有な部分での信仰と、いま一つは現実の苦悩にどう対処していくかという点からの信仰と、二つの側面のあることが大凡理解できるようと思われる。そしてその時、宗教のいかんを問わず手近かにあるも

### △本文△

#### 四川省青城山の道教の現状

青城山は四川省灌県の西南一七キロの地にあり、道教では、ここを「第五洞天」とか「宝仙九室の洞天」と呼んでいる。漢代の張道陵が、山に上つて廬を結び、道を伝えたといわれ、ついに青城山は、我国道教の発生地の一つとなつたのである。

青城山とは青い色の城廓という意味である。青城の第一峰の彭祖峰を軸として、二つの青い峰がうねりながら南に向い、左右に分かれて、抱くように、あるいは椅るように、あるいは箕のように、あるいは廊のような形をしており、廊の外側の崖は赤褐色で、元気な猿でさえ渡りやすく、城廓にとてもよく似ている。その内側は、木々が青々と茂っており、四季変らないところから、「青城」と呼ばれた。

青城山には、歴代にわたつて建てられた宮觀が七〇余あつたが、主要なもの六つは今もある。すなわち建福宮、天師洞古常

のと簡単に結びついていくという感がある。早急に結論するのはやめよう。ともかくこの小論は、ここ一年間、仏教学部の演習ⅠⅡのテキストとして講読してきた成果がその一部となつていて。受講した学生諸氏にとってはあまり面白くない授業であったに違いないが、筆者としては教えられる点の少なくない授業となつた。記して謝意を表したい。また文章化の中で、種々御教示賜り、八月の上海行きも御一緒し、天安門事件以後の中国事情について教えられる点が多かつた、内山書店三浦勝利氏に対しても謝意を表したい。

道觀、祖師殿、上清宮、円明宮、玉清宮などである。一〇年の動乱の最中、道觀は閉鎖され、道士も解散放逐された。党の一  
期三中全会の後、宗教政策がようやく落ち着き、道觀と道士の生産の基地は、順次、道教の管理と使用のために返還され  
た。宗教活動も復活した。青城山の道教協会は天師洞古常道觀にあり、ここ数年、政府の援助のもとに修繕されて、面目を一  
新した。青城から上清宮への山道も幅が拡げられ、もとはたいそう危険なつづら折りの道であったが、今は二人がならんで石  
段を登ることができる。

現在の青城山には道士五〇余人在いて、各宮觀に分かれて住み、そのうち一〇余名の年老いた道士を除くと、のこりは皆な  
若い男女である。この外一〇〇余人のさまざまの年令の居士がいて、各宮觀の仕事を助けている。最近、青城山では、廟をす  
みかとして、一生道に従う全真教徒を募集し、その条件としては、自らの志願であること、家庭が同意していること、未婚で  
あること、三〇歳以下で高等学校程度の文化を有すること、試験では道教についての論文一編を書かせること、その後食費は  
自弁で、道觀で學習、労働と生活を三箇月して、道士達の試験を受けるというものであつた。

採用した青年の道士と道姑は、全員が道士の身なりをし、もと成都の青羊宮の高功であつた江至霖法師から、科儀と誦贊を  
教わり、張志一法師から武功を伝授される。朝と晩に鐘・太鼓をならして諷誦し、昼は雜務をする。彼らのうちの一〇人は、  
北京の中國道教協会に送られて、道教知識専修班で學習し、卒業したものは、古常道觀で管理責任者と食堂管理の仕事に當つ  
てている。

調べたところでは、その中のある女性道士は、母はもと教師であったが、文化大革命であらゆる侮辱を受けて死んだため孤  
児となり、生活のあてもなくなつたので、俗世に見きりをつけて、道姑になつたといふ。またある道姑は、もと中学の国語の  
教師であったが、病氣になつて青城山で保養し、病氣が治つてのち、道教に入つたといふ。

青年道士たちに、どうして道教を信仰するのかを質問すると、皆な道教の後継者がでてくるようにするためと答える。もち  
ろん、各人にもそれぞれの望みがあり、ある者は山の中の清静で自由なことを喜び、ある者は太極拳や武術を練習したいと望  
み、ある者は生きるためにといふ。

青城山の道教の、現在の経済基盤には二つある。一つは生産による収入で、道家飲料工場を開設して、洞天乳酒と洞天ジュー  
ース、サイダーを生産し、道家茶工場を開いて洞天貢茶を生産している。

洞天乳酒の生産には、道家の秘方を用い、青城山でたくさん採れる中華獮猴桃を原料とし、山上の泉の水で醸造している。醸造した乳酒は、「酒の香り、甘み、きれいな色、高い栄養、副作用がない」など多くの優れた点を持つていて。一九八二年、三万元を借金して飲料工場を創設し、自分たちで「洞天牌」という名の洞天乳酒を生産した。この洞天乳酒は、四川省の高級な宴会にも進出して、すでに必備の飲み物となり、さらに四川省の重大科学技術成果賞も獲得した。一年の生産を経て、借金はすべて清算された。現在、青城山の刺梨（獮猴桃）の年産は、六万キロで、つくられる刺梨ジュースは一〇万キロ、乳酒は二〇万キロである。

洞天貢茶は、青城山の道觀の茶畠から採れる。青城山は海拔、気温ともに適当で、雲や霧が多く、茶の葉のできも良い。お茶作りは唐代に初まつたが、清の康熙の時に献上茶に定められた。青城山道家茶工場では、現在すでにフルセットの製茶機械を備え、年産は一千キロに達したので、ようやく売り出せるようになった。

もう一つは、サービスによる収入で、入場料、食堂のサービス、宿泊費などである。青城山の一年の観光客は一〇〇万人に達し、かりに一人一角と計算をすると、門票だけで二〇万元に達することになる。宿泊の収入もまたかなりの額になろう。

青城山の道教は、自給自足の方向で道を開いたが、これは青城山にかなりの発展の実力を蓄えさせた。青城山道教協会会长の傅元天は「解放後の道教は、解放前のように、布施と念懺にすべて頼つて維持することはできない。自らの力で自給自足しようとしてこそ、自分が生存する手だてを創り出せるのだ」と語っている。

建国以来、周恩来、朱徳、陳毅、鄧小平などの同志は前後して山に上った。外国の友人、たとえばスウェーデン国王カール十六世コスタノフと皇后、カナダ、オーストラリア、フランス、東ドイツの友人もたくさんやって来て、その景色の素晴らしさを賞めた。一九八五年六月二一日、趙紫陽総理も、青城山天師洞を遊覧して、山の名勝古跡、およびその発展管理に大いに興味を抱いたのである。

青城山の問題の解決をさらに進めるために、四川省の党委員会と人民政府の配慮の下に、一九八五年の末、政府は山を、道士は道觀を管理すること、廟外からの観光を盛んにすることという正確な原則が確定し、青城山に残された問題が、さらに一步步解決に向つた。宗教界の人々と、多くの教徒の疑惑は打ち消され、団結が強まり、祖国を熱愛し、四つの現代の建設への積極性へと転換したのである。

## 上海のある街区における退職職工の

### キリスト教信仰について

上海のある地区の町は、工場労働者の居住が比較的集中している地区である。関係方面的報告は、近年、この地区的退職した労働者（多くは綿紡工場の女工）の間で、キリスト教を信じる人が増加しており、路地での宗教活動も盛んであると伝えている。私たちは、一九八一年、関係部門と単位の支持と協力のもと、調査を進め、若干の教徒を訪問し、その街のさる居民委員会を重点として、一つの統計を作成した。

この居民委は、世帯数一、二九六戸、人口五、一七九人がおり、そのうち、退職労働者は八〇〇余人、独立した党の支部があり、党員の数は九八人である。現在、キリスト教徒は四〇人を数え、そのうち老人が三四人で、教徒の八五%を占め、その三四人のうち女性が八二%を占める。退職労働者の教徒は全部で二九人で、退職者の三・六%となっている。この情況は、この区における代表的なものである。

この四〇名の教徒の中、文化大革命の前からの信徒である「老」教徒と、文化大革命の中、後期の「新」教徒の数は、ほとんど同じである。彼らは、どうして退職後、宗教に興味を持ち、教えを信じるようになったのであろうか。これが今

人數・時間 対象分類		教徒人數(人)			信教時間(人)		
		合計	男	女	合計	“文革”前	“文革”中、後
老年	退休職工	29	6	23	29	14	15
	家庭婦女	5		5	5	2	3
中青年	在職職工	6	4	2	6	4	2
總計		40	10	30	40	20	20
		100%	25%	75%	100%	50%	50%

回の私たちの調査の目的である。

### 一、老工場労働者の信仰の原因

年とった労働者は、退職後、誰もが晩年は健康であることを希望している。病気に罹らず、健康するために、多くの人は、毎日、公園や緑の多い場所に行つて、体のトレーニングをしている。彼らは、友人や仲間をつくって、運動をしたり、世間話をしたり、病の苦しみを訴え合つたりする。信仰を持つ老婆たちは、皆な苦勞を厭わず、人々に家庭集会を行つて、教えを聞くよう勧めている。（注、當時この地区には、教堂がなかつたので、教徒は家庭に集つて宗教活動を行つた。のち教堂は開放された）。これら年とった労働者はふつうキリスト教の教義については、まつたく知識がないが、しかし教徒から、何が神で、その神と「出会つた」というのを聞き、次第に宗教信仰に対する興味を持つようになり、「ヤソが我を救う」「ヤソにおすがりする」のが、彼らが最も受け入れ易い教義となるのである。

その信仰の原因を探ると、以下の条項を指摘しえよう。

#### （1）身に病気を患い、医者に行つても効果がないと、一転してヤソにする。

退職労働者の多くは、子供の頃からの労働者であつたり、見習い工の出身者で、旧社会で苦勞をなめていた。解放後、彼らは解放はされたが、しかし数一〇年の肉体労働や業務は、彼らの体をいため、退職後に病気のさいなみが起り、彼らは短期のうちに、薬をのみさえすれば病気が治ると想う。こうしてある人は、敬虔にヤソの救いを願い、ヤソに願うことが、幻想における特効薬となる。彼らは教えを信じると、精神に依り処ができる、病気が治るという希望が強まる。しかも精神的な要素は慢性的な病気に対してかなりの影響力を持つから、ある人が信仰を持つたら病気が良くなつたという情況が現れる。彼らはまた、もし信仰が眞面目でなかつたら、もとの病が再発すると心配し、上帝が彼（彼女）の将来の万事が心のままに、一家が平安であるよう保護してくれることを希望して、信仰はさらに強いものとなる。

たとえば、ある退職労働者は重い胃病で、ふだんはあまりの痛さで食事もできず、自分の病気はガンではないかと怖れ、恐怖と痛みの極みにあつた。人の紹介で信仰してから、希望と信仰の心が起き、自覚症状も和らぎ、彼女は、これを神の奇跡と思つて、これ以後、敬虔に信じて疑わない。

この居民委の中で、新たに入信した教徒の一六人の中の一人は、本人、あるいは親族の病気が原因であり、新しく入信した人の六八%を占めている。これが老人の信仰の重要な原因となっている。

## （2）家庭環境の緊張による信仰。

ある退職工の夫婦は、姑と嫁、母と息子の仲が悪く、家庭についてぞ温かみがなく、精神的に苦悶していたが、教徒の間で互いを呼ぶのに、兄弟、姉妹と呼び、関係もうまくいっているのをみて、信仰に心の依り処を求めたのである。

また例えば同じ居民委の、ある老職工は、もとは綿紡工場の労働者で、再婚した夫との間には子がなかつたが、前夫との子が、新疆から上海に転勤して来てから、子供や部屋のことで姑とよめの関係がうまくいかず、夫はいつも彼女を罵り、離婚騒ぎとなつた。彼女はとても苦しみ、それでキリスト教を信じるようになつた。信仰後、彼女は家庭の問題について我慢するようになり、心も明るくなつた。彼女は自分が信じるだけでなく、人にも信仰を勧めた。この路地のキリスト教徒の大多数は、彼女が信仰を勧めたことによる信者である。

## （3）政治運動の中で受けた精神的打撃による信仰。

この居民委に住むざる人は、年は六〇歳すぎで、もとは裁判所に勤めていた。反右派闘争のとき、夫が労働改造所行きの判決を受けたので、離婚の手続きをとつたが、反革命家族とされ、姑や子供とともに甘肅へ送られた。一九六〇年、上海に帰つたが、生活は困窮し、辛抱すること数年して、やつと町内の服務所で仕事がみつかつた。しかし文化大革命の中で批判され、財産は没収され、自分も中風となつてしまい、子供も嫁も彼女との同居を望まなかつた。一九七七年、夫の名誉は回復され、彼女も安定した生活を得るはずであつた。しかし夫は、別に愛人をつくり、彼女の心はさらに傷ついた。その結果、人の勧めで信仰するようになったのである。私たちが訪問したとき、彼女は「今、私は何も考えませんし、何も求めません。主のもとで平安と慰めを求めるだけです。現在の私にはまだまだすべきことがたくさんあり、心に雜念も多すぎます。主の御前でだけ、心の安らぎを得ることができます」と述べている。

## （4）晩年の生活は安定していても、死後の「帰宿」を求めて信仰するもの。

老人達の何人かは、人生はすべてうまくいき、晩年も幸福で満足しているが、しかし彼らも同じように信仰して、熱心な教徒である。七〇余歳の胡というお婆さんは、一九七九年に入信した。彼女は、今生の幸福にはたいへん満足しているが、「来

「世」もまた幸福であるように望んで入信した。彼女は、自分が毎週数回、家庭集会に参加するだけでなく、到る処で、将来一緒に天堂に行けるようになると、ほかのお婆さん達を誘っている。

#### (5) 熱心な教徒による布教も、一部の退職労働者の信仰の客観的な原因となつてゐる。

若干の退職労働者の信仰の原因は、生活の中で苦難に遇つたからではなく、熱心な信徒の布教を聞いたことによるものである。たとえば、公園で体を鍛えているとき、ほとんどの人が熱心に布教をする人に出会つてゐる。ある教徒は、隣の家に病人がいるのを聞くと、さらに積極的に訪問して布教している。またこの居民委には有名な『老ヤソ』と呼ばれる教徒があり、退職後は町のあちこちに出かけて、ヤソの『不思議』を宣伝しており、若干の人はその話しを聞いて信仰に入ったのである。彼女の家の近所には、退職労働者が三三人いるが、そのうちの六人が信徒であり、一八%を占めている。

#### (6) 心の孤独感から信仰するもの。

年をとると、孤独の心理状態に陥りやすく、この生理的変化と、死を怖れる心理とは、密接な関係がある。年とった労働者は、一旦退職すると、今までの忙しくて、規律がある生活が變つて、ヒマで物寂しくなつてくる。多くの人々は、その変化にすぐに適応することができず、生活の上でもなすことなく、ついに気持ちの上でも虚しくなつてしまい、どうやつて日を送るかわからなくなる。これらの教徒は、一般に家事が少なく、ヒマな時間が多い。

ついで、二つの世代の隔たりもまた老人に孤独感を持たせている。すなわち、和氣藹々たるべき家庭において、二つの世代に共通のことばに限りがあり、部屋とか経済上の原因での口争いが少なくなかつたりすると、これも老人の心の苦悶と孤独感を増すものとなる。子供のない老人にいたつては、生活はさらに孤独で、楽しみを欠いたものとなる。彼らは心の虚しさによつて悩み、悩みによつて虚しさを感じ、これらの状態が彼らに家庭集会に対して強い興味を抱かせている。

これら退職工信者の出現について分析すると、彼ら（彼女ら）はおよそ五〇歳から六〇歳前後の年齢の人達である。ある女性労働者は、若い人達のためにといふことで定年になる前に退職したので、まだ五〇歳前であった。この年齢の人は、一般に言わるように、まだ精力的で、活動することを望んでいる。ある人は、退職後、トランプに耽つたり、またある人は教堂や家庭での集会に参加して、彼らの悩みや虚しさの気晴らしさをしたり、心の依り処を探したりしている。

## 二、教徒の行動と人々の反応

(1) これら信仰を持つ退職労働者の大多数は、旧社会で辛酸をなめ、解放後、初めて政治の上で解放され、生活の上でも保證を得たのである。現在、彼（彼女）らの大部分は、自分で造った家を持っている。彼らは宗教を信仰しているにもかかわらず、党に対してもとても深い感情を持っており、社会主義を熱愛している。ある人は「共産党は、私の肉体を救い、キリスト教は私の魂を救つた」「生きているときは党に頼り、死後は上帝に頼る」などと言つてゐるが、これは彼らが、現実生活の中の党と、信仰という幻想の生活の中における神の肖像とともに信じてゐることを示す。

ある教徒は、もともとは、ただヤソを信じて積極的に布教し、人が家庭集会に来て教えを聞くよう勧めるだけで、地元の公共の仕事には関心がなかつたが、地区のキリスト教三自愛国会の人が「神を信じ人を助ける」という道を教えるのを聞いてから、人々のために奉仕し、集団のために良いことをすることこそ本当の「神も人も栄える」道だとわかつた。これ以後、彼女は、積極的に地元のために良いことを行い、地元で困難な物事を解決するのを手つだい、路地の大掃除などにも参加して、居民委の称賛を受けるようになった。

(2) これらの教徒は、礼拝堂で宗教生活を過ごせないため、家庭集会に参加していた。彼らの絶対多数は皆な三自愛国運動を擁護することを表明している。党の宗教政策がさらに根をおろし、礼拝堂が回復するという過程で、彼らは熱心に一部の労働を奉仕し、また礼拝堂の復興と装飾のために喜んで献金したのである。

(3) ある教徒は、彼らの信じる宗教道徳の通りに、「人を愛する心」と忍耐と謙讓の精神に基き、家庭や隣近所との関係を処理している。退職労働者のある人は「私はかつてお金を大切なものと思っていた。だから家はまとまらず、子供との関係もうまく行かなかつた。主を信じて後は、主が人を愛する心を持つべきだと説いているのを知り、私の心も寛大なものとなつて、隣近所や家の中の問題も解決し、関係も改善された」と述べてゐる。別の人一人は、ある時ビールを買ったが、帰宅して、営業員が一瓶多くよこしたのを知り、気がかりで一晩眠れなかつた。翌朝、店の開店を待つて、そのビールを店へ返しに行つた。

### 三、教徒の宗教生活の形式

この居民委の教徒の生活には、三つの形式がある。

(1) 年老いていたり、出かけるのに不便な者を除けば、大多数の信徒は、日曜日には教会に行つて礼拝する。ある者はかなり遠い大教会に行っていたが、付近の教会が回復してから、大多数は付近の教会へ出かけている。

(2) 三・五人が一個所に集つて祈りを行い、今日はこの家、明日はあの家と、固定的な場所、時間、目標はない。ある熱心な教徒は、家の仕事を片付けてから、あちこちの家を訪問し、病人のために祈り、身の回りの世話をし、人々の評判も悪くない。

(3) ある程度固定した家庭集会もある。老教徒の某と某の家には、いつも二、三人から五、六人の人が集り、祈りを捧げたり聖書を読むのを行つてゐる。付近の教堂が回復する前は、この居民委の地区には、二つの固定的な集会の場があつた。一つは真面目な教徒の某の家であつた。夫婦は老教徒で、入信の後、やつと子供ができ病氣も治つたので、いつそう信仰を厚くしたという。彼らの家は広く、毎週数回、夜の集会があり、一〇余人の参加者は、皆な近所の老人で、中には病氣の後遺症のため行動不便な者もあつた。私たちが初めて訪れたとき、丁度集会の礼拝の最中で、彼らは区のキリスト教三自愛国会の連絡員の同志に対して大層好意的であつた。町内の幹部も、また彼らが集会のときに、厳肅で静かであると伝えてくれた。別の一箇所は綿紡工場の退職した女工の某家であつた。彼女には、二階建ての家があつたが、母と娘の二人が住むだけで、四人組粉碎の後、家の集会は毎週固定的に二、三回はあり、人数も比較的多い。一九八一年、最も多いときで一〇〇余人であった。集会のとき、ある人は道を説き、ある人は賛美歌を指導し、ある人は奉獻箱（賽錢を入れる）を管理している。集会参加の人は、多くは老人で、この居民委の人のほか、この地区のほかの居民委からの教徒もいる。そこへやって来て道を説く人の中には、外からの“自由伝道”的の人もいたりする。

### 四、いくつかの見方

(1) 我国の漢民族の中には、鬼神を信じる人が少なくなく、正しい信仰の人が占める割合は大きくななく、この分析は實際と

符合している。当該の居民委の統計によると、キリスト教徒は、居民の総数のわずか〇・八%前後で、信仰を持つ退職労働者も、退職労働者総数の三・六%にしかすぎない。私たちは、信仰を持たない退職労働者には、おおよそ三つの情況の有ることを知った。第一種の人は、政治経済の上で解放され、また党の長期の教育で宗教を信仰しないというもので、主として党員と、町の一部の幹部である。第二種の人は、退職しても一日中、孫の世話などで忙しかったり（主として女工）、あるいはカルタや将棋にふけり（男性）、彼らの精神の依り処が宗教ではなくなっている人たちである。第三種の人は「命中注定論者」である。「命中注定」の思想は、我国の伝統的な「天命」観念の通俗的な表現である。「天命」を信じる人の中もまた宗教を信じることに反対するのである。

この居民委にハ〇歳の老婆がいる。長い間、居民委の小組長を務め、四人の娘があつて、孫も多く、家中うまくいって、毎日充実している。彼女は、自分が、どうして信仰を持たないかについて「神仏を求めるなど無用です。私はもとから信じていません。人の運命は、良くも悪くも決まっているのだから、神を求めて、運命の良し悪しを変えることなどできません」と言う。これは乱暴で浅い考え方であるが、しかし彼女は、漢民族の一部の人々が宗教信仰を拒否する理由を示している。「宿命論」もまた一種の宗教観念ではあるが、しかしそれはある種の宗教と互いに排斥しあうものであり、これら「命中注定論者」も、自分で克服できず抜けだしがたい困難に遇うと、おうおうにして全能の神に希望を寄せて、宗教に転向してしまうのである。

(2) 私たちが、この居民委を選んで調査を実施したのは、主としてこの地区の退職労働者に信仰者が多いからであった。調査を通して、私たちはこの地区が解放前と五〇年代の前期に、五、六箇所のキリスト教会と伝道所のあつたこと、そのせいで、この地区的労働者に教徒が比較的多いこと、多くの老教徒はみな解放後の五〇年代前期に入信したことを見た。一九五八年、キリスト教が連合礼拝を実施したのち、教会に行く人は、次第に少なくなった。一つには一九五七年以後、宗教政策の貫徹に「左」の干渉を受けたことによるし、二つには一九五八年以後、就業人口が増え、人々は仕事が忙しく、教会に通つて宗教生活を行うヒマがなくなつたからである。一〇年の動乱の間、教会は閉鎖され、この地区的綿紡工場は四人組横行時の重災害工場で、労働者の信徒も攻撃を受けた。たとえば、この居民委の二人の綿紡工場の労働者は、別の問題であるのに、反革命の行為を行つたとして処分され、工場でも町内でも、ともに批判され、大衆の監督を受けた。この二人が信徒だったので、そ

のほかの信徒にも影響があつた。党の一一期三中全会ののち、宗教自由の政策が次第に徹底し、信徒もまた公然と宗教生活を送れるようになり、家庭集会も回復、発展した（付近の教堂が、一九八二年の聖誕節に開放されたことによる）。同時に一九七八年以後、多数の労働者が退職して家に帰り、比較的長い時間、宗教生活を過ごすようになつた。もともとの老信徒は、自分が家庭集会に参加するだけでなく、人を集め、信仰を持たない老姉妹に、一緒に参加するよう勧め、わずか四年の内に新しい信徒は増え、もともとの信徒の数とほとんど同じになつた。新老の信徒を問わず、彼らは私たちに対し、これは宗教政策が落ち着いて以後の新しい現象で、「左」の影響を修正してのちに表れた正常な現象であると答えていた。特に退職した労働者は毎日家庭集会に参加する時間が十分にあるから、ある人は、一週間の内に数個所の集会、数個所の礼拝に参加しようとするとする。彼らは、礼拝や説教が多ければ多いほど、上帝に近づけ、魂も早く救われると信じている。これらの現象面でみると、信徒の活動は頻繁で活発である。

(3) 旧社会で辛酸をなめ、新社会で解放された多くの退職労働者の信仰問題について一部の同志は憂慮したことがある。はなはだしい人は、老労働者の信仰は「本質を忘れたもの」と決めつけた。私たちは、調査訪問を通して、社会主義社会では宗教存在の階級的根源はすでに基本的には消滅したが、しかし宗教の生まれる社会的根源と認識の根源は、まだ長期に存在していることを知つた。この種の情況下では、どのみち、信仰をもつ人がでてくることになる。退職労働者の信仰は、彼らが退職後、彼らが自分自身で出会う家庭、社会、経済などの種々の問題に關係があり、また彼らの政治、文化の素養と思想認識の水準とも關係がある。大多数の信仰を持つ退職労働者は、それ以前から、一般的に政治に対する関心は薄く、退職後は、思想の上で簡単に虚しさを感じてしまい、ひとたび脱け難い悩みや実際の問題と出会うと、たちまち簡単に宗教を受け入れてしまう。大多数の退職労働者は、文盲か半文盲で、文化、科学、衛生の知識に欠けており、そのため病気になつたりすると、簡単に宗教を受け入れてしまう。彼らは退職後、心身の健康を求め、「来世の幸福」「死後は天堂に上る」ために信仰しているのである。極端な場合、かなりの退職労働者は、やることがないために、晩年の生活を少しでも「充実」させたくて、その日その日をなんとか暮らすために信仰しているのである。ただし彼らは、解放に感じるところがあり、党や社会主義に対しても良い感情をもち、宗教を信じつつ党を信じ、社会主義を擁護している。

以上的情况によつて、これらすでに信仰を持つ退職労働者に対する対策としては、宗教信仰自由の政策を正確に貫き、愛国宗教組織の

「神を信じ人を助ける」の道理によつて、彼らを愛国愛教に導き、二つの文明建設のために自ら貢献させる、これは必要であるし、また可能のことである。私たちは、常に宗教信仰と、党を信じ社会主義を擁護することの間に、対立を起さないように注意すべきで、このようにしてはじめて人々を団結させ、社会主義建設の新局面を開くのに有利となる。

## 長白山麓の教会

### —東北朝鮮族におけるキリスト教の現状調査—

我国には朝鮮族の同胞が約一七八万人おり、主として東北三省に居住している。その中、遼寧省に約二〇万人、黒竜江省に四〇万人、吉林省に一一〇万人（延辺の朝鮮族自治州の七〇余万人を含む）がいる。いくつかの都市では、朝鮮族が相対的に集中している区域があり、たとえば沈陽の満融屯では、六〇八戸の内、わずか一戸が漢民族で、他はすべて朝鮮族である。朝鮮族居住区の農業経済は、かなり発達しており、文化・教育も普及している。

朝鮮族が、我国の東北地方に居を定めるようになったのは一〇〇余年以前のことだが、規模の大きなものに三つある。（1）早い時期に貧農が国境を越えて来て、荒地を開墾したもの。（2）今世紀の初め、日本帝国主義が朝鮮を併合した際、我国に避難して來たもので、多くが抗日の志士である。（3）三〇年代、日本軍国主義が我国の東北三省を侵略してのち、朝鮮人移民を組織して來させたもの。

一九四五年、第二次世界大戦が終つてのち、半数以上の朝鮮人、特に経済、文化の条件の良かつた人々は、中国を離れ、朝鮮や日本、北米などの地に移つた。したがつて、現在の東北の朝鮮族の住民のほとんどの家も、海外に親戚や友人を持ってゐる。

朝鮮族の同胞は、新中国的建設や中國朝鮮両国の友好を促進する中で、誰もが特別な貢献を果たした。延辺一帯は、ほとんどの郷村にも革命烈士の墓を見ることができる。彼らは、抗日戦争や、解放戦争、朝鮮戦争において英雄的かつ献身的であった。朝鮮族同胞は祖国の独立、解放と繁栄のために大きな代償を払つたのである。

一九八四年六月、私たちは、主として、沈陽市とその郊外の満融屯、蘇家屯、また延辺族自治州の延吉市、図們市、龍井県と

その農村に行つて、朝鮮族のキリスト教の現状について調査した。

## 一

四、五〇年前、東北の朝鮮族には、多種の宗教があつたが、しかし現在は、主として天主教（カトリック）とキリスト教を信奉しており、その他の宗教は極めて少ない。何人かの同志の紹介と、私たちの調査の印象では、キリスト教徒がいる地区は広く、信徒の数もキリスト教のほうが天主教よりは多く、宗教活動も活発であることが明らかになった。朝鮮族のキリスト教は、一九世紀後半に、朝鮮から伝来したもので、当初は五、六の派があり、長老派が最も実力があった。今でも朝鮮族の教会は長老制をとっている。——どの教会も執事を選んで管理し、教務の責任は長老にあって、牧師が招聘されて専門に伝道、宗教行事を行つていている。三〇年代はキリスト教の最盛期であった。のち日本の侵略者は一方では「満州朝鮮キリスト教会」を組織して、教会への統制を強化し、一方では人々に靖国神社参拝を強制し、キリスト教徒は残酷な迫害を受けた。日本の侵略者が降伏する前後、キリスト教もまた一しきり活躍したが、しかしまもなく反共のデマをきいて、ほとんどの牧師や長老は教会の金や財産を持つて国外へ脱出してしまい、教会の活動はその機能をマヒしてしまった。

解放後、朝鮮族のキリスト教も「左」の誤った影響を受けて、早期の一九四五年の光復節の直後（延辺には国民党統治の時代がなかつた）、聖書を焼いたり、教会を壊したりする事件が発生した。たとえば、国内外の朝鮮族にたいへんな影響力があつた沈陽の西塔教会では、一九五一年の春、ある礼拝が終つてから、当地の文化館の人間が突然やつて来て、信徒を追い払い、門を閉ざし、部屋や財産を占拠し、礼拝は場所を変えて行うことが迫られた。文化大革命の時は、どんな宗教活動もすべて非合法と認めつけられたが、しかし多くの信徒の家庭は、貫して深夜に行つたり、あるいは穴蔵で、門や窓を堅く閉ざして集会を行つた。

党の一二期三中全会以後、宗教政策は着実なものとなり、西塔教会も一九七九年の聖誕節に始めて礼拝を回復した。各地の政府と宗教政策部門は、政策遂行のために大変な努力を重ねている。ある幹部は言う「私たちは、信徒を自分の兄弟と思うようにしており、信仰しているしていないにかかわらず、皆な友人です」。ある幹部は、朝鮮族の教会が大変な打撃を受けたので、政策遂行の上で、彼らに対してもより多くの気遣いをし、政策を実行することに努めたのである。四年あまりの間に、全

部で一二の朝鮮族の教会といくつかの集会所が回復し、現在、朝鮮族の牧師二名、長老八名がいる。しかしいずれも沈陽、延吉、鐵嶺、竜井の四箇所であり、教会の多くは、沈陽、延吉付近のいくつかの都市に集中しているから、いまだ朝鮮族教徒の需要を満足させるものではない。一九八二年と一九八四年、朝鮮族教会は、朝鮮語の聖書と賛美歌を続けて出版した。全国の少数民族のキリスト教の中で、朝鮮族の教会はかなり発展し活躍している。

新中国の成立後、朝鮮族のキリスト教も大いなる変化を遂げた。反動が支配していた時期、少数の朝鮮族キリスト教徒は、日偽、あるいは国民党の勢力と結びつき、ある教会の機構は彼らの手中に落ちた。たとえば、滿融屯の教会では、もともと長老であった韓某が反動的な独立党に参加し、国民党の時代には村長と学校長になり、村の教育、政治、教会の三権を掌握したが、彼は解放後に鎮圧された。若干の信者の政治的立場が反動的であったため、当時いくつかの地方では、人々のキリスト教に対するイメージは良くなかった。しかし、現在各地の朝鮮族教会の責任者は、主として信徒の中の在職中、あるいは退職した労働者である。たとえば、延吉市の教会の金長老は州の百貨店の靴と帽子売場の責任者であり、図們市の教会の金執事は服装工場の工場長であり、竜井県の教会の二人の長老は退職労働者であるが、彼らは在職中はいつも賞賛されていた。農村の教会の情況も似ている。たとえば石井村の教徒も多いが、当地の集会所の責任者の金執事はこここの生産隊の新任の隊長である。

朝鮮族のキリスト教徒の中には、五好家庭の称号を得た者の占める率が高い。数人の牧師や長老の家庭はみな五好家庭として評されているが、これは教徒が、社会生活や隣近所との付き合いの中で、社会道徳や文明的行為に優れていることを表わしている。滿融屯の党支部の書記は一つの事件を紹介してくれた。一九八四年五月一八日の夜、部落で大火が発生し、六戸に災害が及び、その内の二戸が全焼した。火災発生後、一部のキリスト教徒は、すぐさま自発的に金銭、衣服、食料を集め、救難のために送つて姓名も告げなかつた。これら信徒の多くは老婦女であるが、彼女らにはほとんど独立した経済力がなく、送つた物の多くは、彼女たちが長年個人的に蓄えたものである。この書記は、キリスト教徒の行為は素晴らしいと言つた。

私たちは、以下のことを知つた。教徒の態度は良く、人々の賞賛を受けることも少なくない。しかもそれだけではなく、一部の信者でない人も信仰に引きよせ、あるいは、初めて信仰する人に信仰は良いことだと悟らせ、教徒の行いを真似させ自分を変えようとさせ、これらの人々の変りようが、さらに宗教の影響を拡大している。たとえば竜井教会の義務工作員の短期訓練班の、ある班員が言うには、彼は一九八〇年に入信したが、未成年の娘は、彼が信仰し道を学ぶことに反対した。そのため彼

は訓練班にいても、心は逆に農業の忙しさを気にかけていた。ある日突然、彼女から彼の家の草取りなどの農事は、全部数人の信徒の助けでやり終えたから、お父さんは安心して聖書を学んでほしいという手紙を受け取った。この出来事で班員は、いつそうキリスト教を信じることは素晴らしいと感じ、彼の大きいほうの娘も、信仰したいと望んだ。別の一女性班員によると、彼女の夫は以前から酒癖が悪く、酔うといつも彼女を打つので、鼻や目を青く腫れあがらせていた。のちに「聖書が、人に善をなすことを勧めるのを聞き、また教えを信じる者が誠実であるのを見て」夫婦とも入信し、夫は酒をやめ、家庭は平和になつたという。そして近年は、働いたおかげで裕福となり、家の中に集会所を作つた。この一家の物質的、精神的生活の変りようが、また多くの人々の入信を誘つている。また二人の朝鮮族の青年がいる。二人とも二〇歳になつたばかりだが、中学卒業後、就職もせず、酒におぼれ悪い習慣に染まつており、その内の一人は与太者のグループに入つて、軍隊の武器を盗む事件を起した。賠償金を払い、二度監獄に入り、親戚や友人はだれも彼をいさめなくなつた。ところが入信してから、人が変り、ゴロツキ連中と付き合わなくなつた。彼らは二人とも「価値ある人間になりたい」「人生の価値を見つけたい」と言つてゐる。一人の青年が道を誤つた過程は、一〇年の動乱が人々の生活価値観を攪乱し、動乱が終つてからも社会は、彼らの生活問題をすぐには解決できず、一部の青年が、分別能力を失つたことを説明している。これらの青年が一旦立ち直ると、人々はおうおうにして簡単に「神の奇跡」と見てしまふのである。かの監獄に入った青年の父親（生産隊の幹部）は子供がこのようになつて、子供がヤソを信じるのは良いことだと思い、子供を教会の義務工作員の訓練班に参加させた。

再び教会が開放されて以来、朝鮮族の信徒の数は、山海関以内の特定地区のようなきわだつた増加はしていないが、宗教政策が貫徹されるにつれ、人数はさらに上昇の勢いである。特に遠い郊外や農村では、道のりや言葉、体力などが原因して、実際には家庭礼拝が多い。一九八四年四月、遼寧省の宗教事務部門は、人を當口に派遣した結果、付近に四個所の朝鮮族の集会所のあることを知り、また農村を子細に調べてさらに少なくとも一三の集会所があることがわかつた。信徒の数も以前の総計より多くなつてゐる。

## 二

民族の言語や歴史の背景が異なるために、漢民族のキリスト教と比較すると、朝鮮族のキリスト教には特長がある。

(1) 民族の宗教としての特色は比較的はつきりしている。今世紀の初め、東北地方にはヨーロッパやアメリカの宣教師がやって来て、いくつかの教会や医院、学校を創設したが、朝鮮地区の多くの教会は彼らが自分たちで作ったものであり、その上、東北三省は長く日本の侵略と支配下にあつたため、朝鮮族の教会は、過去に西欧から人が派遣されてその支配をうけることは少なかつた。日本帝国主義が降伏してのち、彼らは実質上、自存自養の状態にあり、それゆえ朝鮮族のキリスト教徒は、自分たちの教会がとつに「三自」であると認めているのである。別の面でも、彼らが漢民族の教会と往来をすることは多くない。たとえば、沈陽では現在に至るまで、中国語に堪能な朝鮮族の同胞できえ、近くの教会に行くより遠くの朝鮮族の教会に行つて礼拝し、洗礼を受けている。二つの民族が共同に使つてゐる教会であつても、教務、経済と人事は各々独立している。彼らは、礼拝の時は、民族の言葉による聖書、讃美歌を使い、また民族の習慣によつて、男女は分かれてあぐらをかけて座つてゐる。信徒もそうでない人も、同じようにもとの民族の礼儀、風俗、習慣を大切にしている。伝統的な民族の祝祭日になるたびに、教会は信徒を集めて一緒に園遊や野外パーティを行つてゐる。朝鮮族信徒は、自分の民族の教会に対して特別な感情を抱いており、礼拝堂の修理があるなどと聞くと、老女の信徒できえも連れだつて、次々と義務労働に参加し、一カゴ一カゴ、泥灰やゴミを頭上に載せて運び出す。かつては西塔教会が東北朝鮮族キリスト教のエルサレムー聖地ーとされ、現在、全東北地区の朝鮮語の聖書の発行は西塔でなされており、各地の朝鮮族の教会の情報について、西塔教会はそのほとんどを知つており、外籍の朝鮮族キリスト教徒が東北にやつて来たときは、必ず西塔に来て参觀する。朝鮮族の教徒には、実際に彼ら民族の教会の中心があるのである。

現在、朝鮮族キリスト教徒もキリスト教の三自愛国運動に参加しており、各地の教会、集会所には、どこにも三自委員会あるいは三自小組がある。しかし、朝鮮族の教徒の人々の間には、キリスト教の反帝愛国の立場と、自主弁教の方針に対して、認識、行動を問わず、いささかの不均衡が存在している。

そこで、各地の朝鮮族教会を健全なる発展に導くことはまた一つの重要な任務といえる。現在、西塔教会は、全国のキリスト教の刊行物の中から若干の愛国の宣伝材料を選んで、自ら朝鮮語の教会刊行物としてガリバン印刷しており、深く各地の歓迎を受けている。

(2) 信徒の信仰は代々伝わっており、その基盤は深い。朝鮮族の教徒の数は、早い時期に比べれば減少はしているものの、

しかし現在教会に通う信徒の多くは、何代も伝わった老信徒で、宗教信仰はすでに彼らの生活の一部分となっていて、その影響も極めて深い。かつて宗教生活が一二〇余年にわたって中断し、ある地区はもつと長く、ある信徒は信仰により塗炭の苦しみをなめたが、彼らは敬虔に信じて変ることがなかつた。党の一一期三中全会後、宗教政策は落ち着き、彼らはさらにキリスト教を堅く信じている。遼寧省の労働模範の李某は、父は教会の執事だったが、三七年前に南朝鮮へ行ってしまった。当時わずか八歳の彼女は、今でも父が教えた讃美歌や聖書のことを覚えている。父は、忠厚な人となりで、後半生は、異国でやもめ暮らしをしたが、己に打ち勝つて全精力を貧しい者の救済や宣教に注ぎ、そのことは、彼女に「キリストを信じることの素晴らしさ」の印象を残した。六年前に父と娘は連絡がとれ、彼女は、父の出国して会おうという望みに同意しなかつたけれども、父の、彼女に信仰と教会の仕事を援助して欲しいという望みは受け取り、彼女は自から洗礼を受けたあと、ついで三人の子供にも信仰を勧め、また大きい子に神学を勉強するよう勧めようとしている。彼女は毎日西塔教会へ出かけ教会の刊行物をガリバン印刷し、教会の助手となつてゐる。

ある老信徒は、毎日、早朝四時に教会に行つて礼拝している。ある在校中の学生は、宗教信仰もまた極めて堅い。竜井県石井村のある女学生は、祖母とともに生活しているが、家は集会所である。彼女は眞面目に勉強し、全省の中學卒業生の統一テストで第三位となり、しかも彼女は、学校で自分が信徒であることを公表している。

朝鮮族の教会は、後継者の養成を大層重視している。彼らの間では、定年で退職した教徒が教会で長老や執事の任に当たり、教会管理の責任を持つてゐる。一部の年若い在職中の教徒も、しばしば訓練班に進んで神学を学ぶことを望んでゐる。延辺だけでも連續して二年、義務工作人員の訓練班を開催していた。このような長老、執事、義務工作者、神学生は、もともと先代の長老や執事の後継ぎたちであることが多い。宗教は信徒について、おうおうにして大きな伝統性と繼承性があると説かれるが、これは朝鮮族キリスト教においても同じであり、しかもより明らかである。

朝鮮族の同胞の文化水準は明らかに高く、言うところによれば、暮らし向きがひどく悪くなつても、子供は学校に入れたいといふ。信徒は、皆な文化や信仰の内容において健全である。教会の内外を問わず、正当な教義にたがう神怪の故事を聞き入れることはめつたになく、鬼を追いはらつて病氣を治すなどという手段で入信を勧めるような情況もここで聞くことがない。

(3) 海外との往来や交際のルートが多い。朝鮮族の海外との往来は、都會田舎の区別がなく、多数の教徒の家が、海外の親

族と関係がある。教会を来訪する外国人は日に日に増えている。ここ数年、沈陽の西塔教会を参観した外国人や華僑は四、五〇人を下らず、延辺一帯の教会を訪問した人も二〇余人いる。

国外の親族の訪中団や外国人が中国教会を友好訪問すると、各地の教会はどこでも一所懸命、中国の教会の情況を紹介している。彼らは、国外との友好往来を、国際交流と我国の四つの近代化建設と世界平和に貢献するものと思っている。対外開放の中では、人が親戚友人の紹介などによつて、宗教を受け入れることは避け難いし、また国外の親戚友人が送つてくれた宗教方面的書籍を手に入れたりするのは自然なことである。ある信徒の家で、私たちは、彼らの親戚が、国外で牧師として伝道している写真を見たし、あるいは彼らは親戚友人がくれた讃美歌を持っていた。朝鮮族教徒と海外の人々との往来の絶対多数は正常であるが、ただ我々は、国外の、ある反中国、反共産主義の勢力が、依然として確実に宗教のルートを利用して、我国に對して、政治を転覆する活動を進めようとしていることを紹介説明された。もつともそれは東北の地理的位置の重要性と、朝鮮族の歴史的背景の特殊性によるものであり、これからすると對外交流には複雑な一面もあることとなる。たとえば、①ある国外の宣教機構は、放送局などの現代的手段によつて、我国に宣伝している。彼らの放送は一日中、夜になつても放送をやめず、民族感情を利用して、同じ民族であることを鼓吹し、心を祖国に向けるように世論を作つてゐる。②ある来訪者は、当地の教務に干渉し、あるいは教徒の間で、利益で誘惑したり仲間を挑発したりしてゐるが、その目的は、我国キリスト教の独立自主の方針を破壊して、外国勢力が、再び中国キリスト教を支配することを企つたものである。彼らは親戚や友人を広く訪問して、物を贈つたり巨額な借金に応じ、あらゆる手だてで、当地の教会と彼らが関係を結ぶことを図つてゐる。ある時は、勝手に聖礼を行つて、聖職者となり、別の一派を立てたりした。またある者は、愛國の道を歩む教会の牧師をニセ牧師と罵つたりし、朝鮮族教会が三自愛国之道から離反させようと妄想している。③別の反動分子やスペイも宗教を利用し、民族感情を利用して、政治に結びつく活動を進め、情報を収集している。このような情況は、ほかの地方の教会と比べると、朝鮮族の教会ではきわだつており、特に警戒を必要とする。

党の一一期三中全会の精神の貫徹によつて、宗教政策が落ち着くにつれ、長白山麓の朝鮮族のキリスト教徒の積極性の要素が動員され、彼らが国際交流と、国内の四つの近代化建設において、正しく各自の働きを發揮している。まさに関係文献が指摘するように、宗教問題処理の是非は、国家の安定と民族の團結、国際交流の発展と国外の敵対勢力の浸透への抵抗、社会主

義物質文明と精神文化の建設において、ゆるがせにできない重要な意味を持つ。今回の調査は、この一点を正しく説明したのである。

## 青浦県の漁民教徒の信仰情況初探

——併せて団結する信者に対し宗教政策を貫徹することの重要性を論ず——

一九八三年五月二日、上海の天主教（カトリック）の聖地の佘山で、正常な宗教活動をしている教徒のうち、最も人の注目を引いたのは、青浦県の漁民の教徒の聖地参拝団である。早朝の五時頃、二千余名の教徒が青浦県の各水産大隊から続々と佘山にやって来る。彼らは整然と佘山のふもとに集つて、長い列を作り、高らかに経文を唱えつつ、ゆっくりと山頂へ上り、今ちょうど修繕中の教会に入つて、ミサに参列する。ミサが終ると、彼らはまた、中山の『聖母亭』などの『三聖亭』の前に下つてきて、そこでひざまずき、三三五五、グループとなつてともに経文を念じ、ある者は新しく修復された「経折路」に沿つて「苦路」を拝している。午前中一杯、彼らは深い宗教的雰囲気にひたるのである。

我国は、社会主義国家である。建国してすでに三〇年以上が過ぎても、青浦県の漁民教徒は依然として、虔誠に彼らの宗教信仰を保持しているが、その原因はどこにあるのか。彼らがこのように虔誠に宗教信仰を保ち、聖地参拝などの宗教活動を行っていることは、社会主義の事業にとって良くないのかどうか。この二つの問題について、本稿は検討を試みたい。

### 世代教徒

青浦県の天主教教徒は、漁民が大部分を占め、解放初期の統計によれば、人数は、九千名から一万名の間である。これらの漁民教徒は、過去三〇年余のうちに四分の一はすでに世を去っている。当時三〇歳余以上の中年の人も、現在では六〇余歳以上の老人であり、一〇歳以上の青年も、現在では四〇歳以上の中年となっている。この、現在六〇余歳と四〇余歳以上の青浦県の老中年教徒が、今日の青浦県の漁民教徒の中心となっている。

解放以前は、外国の勢力が中国天主教教会を支配していた。教会は入信した教徒を「教民」とし、教徒の父母に子供が生ま

れたら、必ず三日から八日のうちに新生児を教会へ伴い、神父から「洗礼」を受けるべきであるとした。青浦県の漁民教徒は、また「網船教徒」とも呼ばれる。彼らは、船を住み家として、魚、エビ、カニなどを採る水産を業とし、青浦県内外のクリークを漂泊しているので、子供が生まれても、時には期限内に子供を連れて教会に行き、神父の「洗礼」を受けるのが不可能なこともあつた。このような情況のもと、教会はまた、父母は、神父が認めた「権付先生」と呼ばれる教徒から、新生児に「権付」してもらい、のちにもう一度子供をつれて教会に行つて、神父から「補礼」してもらうことを規定した。今日の青浦県の老中年の漁民教徒は、このように生まれるとすぐ「洗礼」されて入教した人達である。

青浦県の漁民教徒の第一代の人々の入信の情況については、明確な歴史の記載が欠けている。宣教師が記した『江南伝教史』の江南の漁民教徒についてのわずかな記述の中に見ることができが、清の康熙帝の時代、水郷にすでに漁民教徒がいた。雍正帝が天主教の布教を禁止して一〇〇余年、天主教の教徒数は激減したが、絶滅したわけではなく、しかも隠れた宣教師がいたのである。當時、江南に隠れた宣教師の中には、文字通り漁船に潜み、昼は隠れ夜に活動した者もあつた。白鶴の漁民新村に住む八三歳の吳という教徒は、今でも幼いとき祖母が語った、雍正帝ののちの宣教師が、夜間に宣教活動をしたという話を思い出すという。青浦県の漁民教徒には、二、三〇〇年の信教の歴史があり、彼らの宗教信仰は、二、三〇〇年前の頃の祖先から代々伝わってきたものなのである。このため今日の青浦県の老中年の漁民教徒に、信教の歴史を問うと、明確にはその祖先の信仰の情況について答えられないものの、誰もが率直に「自分は代々の教徒である」「私たちは古くからの教徒である」と回答できる。

### 小教徒から成年教徒へ

旧社会では、「網船教徒」の一家は、一世代、はなはだしくは三世代が四尺のベッドを置くこともできない小舟の上で生活していた。ふだんは、これらの「世代教徒」は、船上で、朝の「朝課の読経」、夕方の「晩課の読経」の宗教活動を行つている。日曜日は、天主教で「主の日」と呼ばれるが、彼らはもし教会に行くことができなければ、船で「主の日の礼拝」のための「讀經」の宗教活動を行つている。このように漁船で宗教活動を行うことは、彼らの宗教生活の一部である。

青浦県の漁民の信徒が当時所属していた天主堂は主として泰来橋、楊字圩、朱家角の三つの天主堂である。泰来橋と楊字圩

の天主堂の主事は同じ「本堂神父」で、朱家角天主堂は一九四五年から「本堂神父」がいるようになつた。「本堂神父」が管理している天主堂は「会口」と呼ばれている。各「会口」の一年の主要なる活動として「開四規」がある。「四規」とは、日曜日と「聖誕節」などのいくつかの大祭日の「該与ミサ」、金曜日の「該守齋」、毎年の少なくとも一回の「告解」（神父に罪を告白すること）と「領聖体」を行つて、教会に寄付を募るという四つの規則である。

「開四規」とは、一年のうち「告解」と「領聖体」を少なくとも一回行うという教規を実行することである。「開四規」の日取りは、本堂神父が自ら定める。そのときには漁民教徒は必ず自分の所属する「会口」の教会の近くまで船をこいで行き、少なくとも数日、多ければ一週間以上、「開四規」などの宗教活動に参加する。「開四規」を除いて泰来橋、楊字圩、朱家角の天主堂では、さらに「ヤソ復活」「ヤソ聖誕」「聖母昇天」「本堂瞻礼」を「大会期」とし、「封齋」「開聖母月」「聖神降臨」「聖母聖誕」「諸聖」「追思已亡」を「小会期」とし、漁民教徒は、必ず船をこいで教会に来て、「会期」の宗教活動を行う。

五月は天主教では「聖母月」と定められている。上海の天主教の聖地詣での佘山のお参り活動で、主要なものは五月のうちにおこなわれる。青浦県の漁民教徒は、本堂神父が定めた「聖母月朝聖日」に、また船で佘山にやつてき、数百の漁船が一かたまりとなつて家中の者がともに山に上つてお参りをする。

現在の青浦県の老中年の漁民教徒は、幼いときから父母に従つて、毎年上述のさまざまな宗教活動に参加し父母あるいは祖父母の話や行動の中から、経文を読誦し、宗教活動を行うときの礼拝などの儀式を学ぶこととなり、だから宗教活動に参加して、儀礼をおこなうのは、ふだんやつていることなのである。

旧社会において、大多数の「網船教徒」の家の子は本を読むことがなかつたが、しかし皆な「読經班」にすすんだ。「読經班」に進む前から、彼らは班で必ず読む『六様経』と『要理問答』についてある程度は聞いたり学んでいるから、ふつうは、三箇月あるいは半年もすると完全に暗唱ができる。「読經」が終ると、本堂神父の面接試験を受けなくてはならない。『六様経』は文語体であるから、彼らは暗唱はできるものの、その意味は完全に分るわけではない。『要理問答』は口語体であり、彼らは暗唱でき意味も分っている。そこで「読經班」に進んでのち少なくとも『要理問答』の中のある程度の天主教の教理については、みな彼らのあたまに入ることになる。

『六様経』と『要理問答』を読みおえると、ついで「初告解」（初めて神父に対して罪を告白する）と「初領聖体」（ミサの

とき、神父が分ける聖体を初めてもらう）がある。幼いときに入信した子供にとつて、「初告解」と「初領聖体」とは境界線である。「初告解」「初領聖体」の前では、彼らは、父母と同じように「領聖事」を行なうことはできない。「初告解」を通過し、「初領聖体」してのちに、彼らは父母と同じように「領聖事」を行うことができるようになり、だから「初告解」と「初領聖体」ののちの子供は、一人の完全な小教徒となるのである。

「初告解」「初領聖体」ののち、子供たちは船に戻り、「読經班」に入る以前の生活を続けることになる。ただし経済条件が少し良い「網船教徒」の家庭では、子供を泰来橋天主堂の經營する望道小学校に入れて勉強させることができる。泰来橋天主堂は、当時、青浦県の天主教徒を管理する神父がいたところである。望道小学校で勉強している漁民教徒の家の子は、皆な「住読生」である。泰来橋天主堂で頻繁に行われる宗教活動に彼らは必ず参加する。その上、望道小学校のカリキュラムの中で、宗教の科目は主要科目の一つである。耳に聞き、目で見、身で行うことにより、これらの子供は、天主教の教義とその影響を受け、それは「読經班」に進んだときよりも一層深いものがある。

もちろん「読經班」から船に戻った子も、あるいは望道小学校で勉強する子も、「初告解」や「初領聖体」ののちは、主教が「遊堂」するに際しては、みな「領堅振」を示さなくてはならない。当時、泰来橋などの天主堂では、主教は四年ごとに「遊堂」を一回行つた。主教が遊堂して天主堂に来るときは、その教会所属の「網船教徒」は、みな船で集り、主教の行う宗教活動に参加する。彼らの子供で「初告解」「初領聖体」はすんでいるが「領堅振」がすんでいないものは、主教手ずから「領堅振」を受けた。『要理問答』の説くところによれば、「領堅振」をさせるのは「信心を堅固」にすることであり、「ヤソの勇兵となり」「言と行とで自己の信徳を証かしをたて、生命をかけるまでにさせる」ことである。これからみれば「領堅振」とは、実際にはこれらの子供が宗教の信条を「堅く信じている」ことを表わす、一つの宣誓である。今日の青浦県の四〇歳以上の老中年の漁民教徒は、一〇数歳で「領堅振」するとき、みなこのような「堅振」の儀礼を行つている。

一人の人間が、幼年時代に受ける家庭、社会、教育の影響は、彼らの、のちのちの成長にとても重要な関係がある。今日の老中年の漁民教徒は、小さいときから漁船で暮らして外界とは極めて少ない接触しかなく、出かけるところは主として天主堂であり、受けるのは主として宗教の影響である。宗教思想の意識は、彼らの心に深々と烙印を押し、彼らの言行の基準を支配するまでになっている。

「網船教徒」の子は、結婚のときには必ず教会で神父に「降福婚配」を願う。しかも「降福婚配」の前には必ず「読経」終了のときと同じく、「本堂神父」により面接して「考道理」を受ける。今日の青浦県の五〇歳以上の漁民教徒は、結婚のとき、すべて「考道理」の関門を経て、小教徒から、成年教徒への過程を通過できたのである。

### 宗教思想の影響の例

青浦県の漁民教徒の上述のような信仰の過程は、彼らの信仰を十分に虔誠なものとしており、わずかな物事への見方にも、完全に宗教の影響を受けたものとなっている。

ここ一〇〇年来、帝国主義は天主教を利用して中国を侵略してきた。この歴史的な事実に対しても「教民」となった青浦県の漁民教徒は、しかし全く無知であった。彼らはただ天主教が「真教」であることを知つてはいても、帝国主義がそれを利用していることは知らなかつたのである。貧富や苦楽の問題についても天主教の「道理」は、彼らが全てを「天主の御心」と信すべきものであるとしており、彼らはそう信じたのである。たとえば旧社会で出会う苦難について、貧苦の漁民教徒は、これが搾取制度の構造であると、根本的に認識するには至らなかつた。彼らは天主教の「道理」によって、現実世界を「天主の御心」による「苦の世界」とし、人が苦を受けるのは、自分に「罪」があるからで、これは「天主が下された罰」とみなし、そして今世の苦は、「しばらく」のもので「来世の福」は「永遠のもの」であると信じ、ひたすら教えを信じ「天主の御心」を聞いて、現世の「しばらくの苦」を「忍受」しさえすれば、「来世の福」を獲得できるとみる。解放前、貧苦の漁民教徒の生活には、わずかの保証もなかつた。小さな小船で江河を漂い、ときには不測の事故の恐れもあつた。彼らは一面では天主教が彼らに求める、現世の「しばらくの苦しみ」を「忍受」せよという「道理」を信じ、同時にまた「天主、ヤソ、聖母の助けを祈ること」で、彼らが苦難から免れることを信じたのである。ときに、彼らの中の誰かが偶然にも苦難を逃れたりすると、さらに「天主、ヤソ、聖母の助け」の「不思議」なることを信じたのである。

解放公社の城建大隊の張某という漁民教徒は、今でも彼の家庭が偽政権のとき難から逃れたのは「天主の助け」によると信じている。当時、上海は日寇の蹄鉄の蹂躪の下にあつた。一般人が検問所を通りぬけるには「良民証」を示さなければならない。張という教徒の父は自分が捕つたエビを持って泗涇で売ろうとしたが、「良民証」を忘れて日寇に捕えられた。あ

る所に連れて行かれ、ひざまずかされ、刀が振りあげられた。話によれば、そのとき、かの父は口に「ヤソ、お救いください」と唱えた。日寇は彼が何を言っているのか分らなかつたが、彼の胸元に十字架が掛かっているのを見て一声「西側の奴だ」と言い、彼を放免した。抗日戦争中、バチカンの駐中国天主教会の「代表」であるイタリア人蔡寧と、上海天主教会の主教であるフランス人恵濟良は、中国人教徒に、日寇の統治に従うよう命令し、日寇に対する反抗行動を許さなかつた。日寇がこの人の胸に十字架があるのを見て放免したのは、明らかにこれが反抗しない教徒であることを見て取つたからである。ただこの張某の父は、逆に彼が「ヤソ救いたまえ」と念じたことで「ヤソの助け」があつたと信じ、一家の人の信仰はさらに虔誠なものとなつたのである。あるとき、彼らはまた偶然にも順調にことが運び、たとえば魚やエビ、カニの捕獲がうまくいくと、このときも彼らはまた天主教の「道理」のいう「天主のお誉め」があつたとして、さらに虔誠さを増すのである。

旧社会では、宗教の影響を深く受けた青浦県の貧苦の漁民教徒は、一面では苦難は「天主の御心」と信じて耐え忍び、一面では苦しみから逃れるために「天主、ヤソ、聖母の助け」を祈り、いつもがこのようで、その中の多くの人々の虔誠さは、年齢とともに深いものとなつていつたのである。

### 解放から文化大革命の前まで

解放されて、青浦県の漁民教徒は、彼らの虔誠なる宗教信仰を保つたまま、旧社会から新社会へと移つた。解放の前後、天主教内には、常に共産党は「教えを滅ぼす」などのデマが撒き散らされ、その上、当時の上海教会の指導者がバチカンの意志によつて、教徒が共産党を擁護することを許さないなどの命令を下したために、多くの教徒は党と政府に歩み寄ろうとせず、愛国の表明をしなかつた。一九五三年と一九五五年、天主教内部では帝国主義分子と反革命分子を除く闘争が展開され、教徒の身を圧迫していた大石は取り除かれた。しかし青浦県の漁民教徒は、まだ反帝・肅反の闘争が、正しい宗教信仰を保護するものであることを認識するには至つていなかつた。ある教徒は、宗教の着物を着た帝国主義分子と反革命分子を、誤つて「神長」と考え、敵と味方の境界線をはつきりと引くことを表明できなかつた。のち学習を通して、青浦県の漁民教徒もようやくこの宗教の衣を着た帝国主義分子と反革命分子が、法律に違反し、中国人民の利益に危害を加え、さらにこれは教義の許すところでもなく、教規の容れるところでもないことがわかり、ようやく積極的に、教義の中の人を愛する精神や、天主教の「十

誠」の第四の愛国の誠めを根拠として、宗教の衣を着た帝国主義分子と反革命分子の罪行を指弾し、彼らと敵味方の境界線をはつきりと引くことを表明して、心の平安をえたのである。

しかし、ちょうど青浦県の漁民教徒が愛国愛教の道を歩きはじめたころ、宗教政策を執行する上で「左」の影響がちらつきはじめ、正当な宗教活動と迷信をゴチャマゼにして、宗教活動は「生産活動を妨げる」という「理由」で教会を縮少したり、宗教活動を圧迫する措置が取られたのである。漁民教徒が教会に行かなくなつたのは、教会に行くことで白眼視されることを怖れたからである。彼らは船で念経し宗教生活を過ごしたのである。一九五八年以後、泰来橋の天主堂はひつそりと静まりかえり、一九六四年の聖誕節の朱家角天主堂もさみしいもので、ミサに参加した漁民教徒はわずか一〇〇余人であった。これらのこととは漁民教徒が虔誠でなく信仰していないことではない。かえって、これは彼らが宗教政策に新たな疑問を抱き、党と政府に新たな疎外感を抱いたことを示している。反帝肅反の闘争の中での宗教政策の貫徹と教徒に対する辛抱強い教育はやつとすることで漁民教徒を愛国愛教の列につかせた。ところが「左」の影響は、また彼らを愛国愛教の道から退かせ、教徒を団結させることで大きな損失を与えたのである。

### 文化大革命中も信仰を捨てなかつた

一九六六年、一たび「文化大革命」が始まると、青浦県の天主堂はことごとく閉鎖され壊された。教会とは、教徒の言葉で「聖堂」とも言い、神聖な場所である。一九五八年以後「左」の影響はすでに教徒に宗教政策に、疑いを抱かせており「文化大革命」が起こり、彼らが「聖堂」の破壊を目のあたりにしたとき、どのような想いを抱いたであろうか。解放後、彼らはもともと党と政府が「教えを滅ぼす」と思つており、今や教会のすべてが閉鎖されて、それでもまだ教えを滅ぼすのではないかというのであろうか。滅教は教徒にとっては大災難であり、それがついに彼らの頭上に降り注いだのである。

教会の破壊とともに、教徒は信仰の自由という公民の権利も完全に剥奪された。「経」を念ずることは許されず、漁船に「聖像」を置くことは許されず、教徒が身に「聖牌」を掛ることも許されず、「聖像」「聖牌」「念珠」はすべて提出させられた。それだけでなく、ある虔誠な教徒は批判され、はなはだしいときは牢に入れられたのである。たとえば白鶴水産大隊の、現在は青浦県天主愛国会の副主任のある教徒は、小さな漁船を捜査さ

れること四回、彼が望道小学五年のクラスで使っていたいくつかの宗教の本、彼がとても愛していた三本の銀のチエーン、銀の「聖牌」などはすべて没収され、そのうえ「スペイ」と誣告されて、二年一箇月も牢に入れられた。趙巷水産大隊の現在の五〇歳のある教徒は、教会の小学で勉強したのでその神父と知りあいであったため、「牛鬼蛇神」のように打たれ、家の「経」もすべて没収された。上述の、偽政権の時代に難を逃れられたのは「ヤソの助け」と主張する張某なる教徒も、「資本主義」の帽子をかぶされて八箇月にわたって批判されたのである。

極「左」路線の推進者は、中国をすでに「無宗教国家」になつたと考えたのである。しかしそれは教会が破壊され、教徒が攻撃された日が、虔誠な教徒がその信仰をいよいよ堅いものとする、正しくその日だったことを知らなかつたからである。罪なくして批判され牢に入った青浦県の漁民教徒は、彼らが保持してきた信仰の中に慰めを求めた。彼らは今でも皆な、あのとき彼らは内心で、自分を彼らが信じる「十字架の上のヤソ」になぞらえて激励し、受ける苦難を「天主に捧げ」れば「天主が彼らを誉めてくれる」と信じたという。「経」を念ずるのはゆるされないので、ある教徒は心に黙念し、ある者は他人に聞えないような河で行い、あるときは一隻の船の一家の人人が、あるときは数隻の漁船が一緒になつて、昔のように高らかに唱えていた。「念珠」や「念牌」は没収されてしまつていた。ある漁民教徒は方法を考えてそれらを誰にも見つからない所に隠した。極「左」路線の、行政手段で教徒の信仰を禁止する企ては、結果として反対のものとなつた。この事実は教徒の信仰は行政手段では禁止できないということの有力な証拠となつてゐる。

### 宗教政策が破壊されて敵に乘じる機を与えた

解放後、天主教徒が展開した反帝愛国運動はバランスのとれたものではなかつた。青浦県の漁民教徒の中では、ある者は學習を通して、程度は異なるが認識を高めた。しかしある者は反帝愛国の教育を受けていなかつたりした。「文化大革命」中に攻撃を受けた教徒の、ある者はまさしく五〇年代の反帝愛国運動の中で大量に生まれた愛国愛教の道を歩む教徒である。その教徒への攻撃は、とりもなおさず教徒の中で最も愛国心のある人々への攻撃であつた。天主教の情況は複雑で、常に誰かが宗教を利用してひそかに悪いことをやろうとしている。青浦県の反帝愛国教育を受けなかつた漁民教徒は、一般的の問題の認識も曖昧であるが、正当な宗教活動と宗教の衣で蓋つた違法活動を区別する能力にも欠けていたから、もともとだまされやす

い。宗教政策が破壊され、青浦県の漁民教徒の中の愛国心のある人々がやられてしまってから、一旦、誰かが彼らの中で画策すると、彼らはもつと簡単にだまされるのである。一九八〇年三月、上海の郊外の県ではまだ一つの教会も開放されていなかつた時に、青浦県のある漁民教徒が「聖母」が余山で「光を発し聖体を顕わした」というデマを聞いた。彼らはすでに少なくとも一〇数年は余山に行つて「聖母を拝し」ていなかつたので、一たびデマを聞き、さらに誰かの煽動があると、生産を放棄して余山に行き、「聖母の発光と顯聖」をみようとした。彼らが余山に到ると、ある者は彼らをかくれミノとして利用して、人の群れの中にまじつて、反動的スローガンをとなえ、政府をののしり、暴行や、打ちこわし等をしたのである。宗教方面における敵対勢力の破壊の影響で、党の十一期三中全会後に、宗教政策が再び恢復した時でも、青浦県の漁民教徒の中では逆に混乱が生じ、安定團結に不利なる要素が出現し、宗教の衣を着た違法活動は上海の教会の独立自主自弁の教会活動を分裂させ、裏で蔓延したデマも多いのである。

### 宗教政策をしつかり貫徹させ虔誠な教徒を団結させた

極「左」路線が宗教政策を破壊したことで教徒は宗教政策をまったく信じなくなってしまった。彼らに宗教政策を信じさせるのは、ただ宗教政策を貫徹するという実際行動をもち出して、教徒に宗教政策がほんとうに貫徹されている事実を見てとらせて、はじめて教徒に信じられ、彼らの中で、宗教の衣に蓋われた非法違法の活動のはつきりとしていたために問題を生じさせていたものも、解決しやすくなるのである。青浦県の党委員会と人民政府と関係部門の、確實かつまじめな宗教政策の貫徹によつて青浦県の漁民教徒は、以下のような事実を見てとつたのである。すなわち彼らは冤罪を被つた者が、再度の審査によつて、六五人全員が名譽を回復したこと、また幹部が一所懸命にくり返し訪問をかさね、彼らと友達となり、腹蔵なく彼らの考え方のわだかまりを解いたこと、「文化大革命」中に分かれ分かれになつてしまつた、五〇年代に愛国愛教の道を歩んだ教徒が、一人一人探されて戻ってきたこと、また神父や修道女、教徒が青浦県や朱家角鎮の人民代表、あるいは政協委員になつたこと、関係部門が組織して一部の教徒を参観遊覽につれていったこと、朱家角の教会が開放される前、彼らの生産に影響のない時をみはからつて、上海の開放された教会へつれて行つて宗教生活を行わせ、しかも関係の単位の指導者が少しも、白眼視しないばかりか、支持もしていることなどをみてとつたのである。このほか彼らは、「聖母の発光顯聖」のデマを言じ

て、余山へ行きだまされた教徒に対して、関係部門は厳密に性質の異なる矛盾を区分し、忍耐強く懇切丁寧に、綿密なる思想工作を行い、彼らに教訓を汲みとらせ、少しでも変化や向上があれば、熱意をこめて、激励したことを見えてとつた。これらにより人々は大いに感動し、教育を受け、一つのかたまりに団結したのである。あるだまされた教徒は、認識を高めた後、自分の身をもつてみなに教え、またある人は非法違法の活動をした人に対して嘘をあばき、面と向つての闘争を進めた。青浦県の漁民教徒の混乱は急速に是正され、消極的な要素は積極的な要素へと転じたのである。

青浦県の漁民教徒にさらに宗教政策を信じさせた決定的な作用は、朱家角天主堂の返還と修復開放であった。彼らは正当な宗教活動を進めるための要求に満足を得たのである。一九八〇年一二月、上海市と青浦県の宗教工作部門の大いなる支持の下、また上海市天主教愛国会の協力の下、青浦県の天主教は、第一回代表会議を開き、教徒・神父・修道女によつて組織された青浦県天主教代表会議開催に先だって、多くの漁民が痛切にその開放を望んでいた朱家角の天主堂は、すでに占用していた単位から回収され、修繕をはじめていた。青浦県の天主教愛国会が成立して後、政府が宗教政策を貫徹するのを積極的に援助し、教会の修理を早め、さらに十二月二十五日の天主教最大の祝日である「ヤソ聖誕ミサ」の日を教会開放日と決めた。この日、一千余の教徒がこの上海市郊外の県で最初恢復した教会に集まり「聖誕節」を祝つた。すでに一〇年以上、甚しきは二〇年前後、ミサに参列できず宗教上の「心が平安でない」教徒は、「半夜のミサ」あるいは「夜明けのミサ」に臨み、大いに喜び、衷心から、党と政府、宗教工作部門、愛国会に感謝したのである。多くの教徒が、幹部や愛国会の会員に感謝の心を表わす時、感謝のあまり涙を流した。

ここ数年の宗教政策のたゆまざる貫徹と落ちつきにつれて、青浦県の漁民教徒は党と政府の宗教政策貫徹への理解を深くし、愛国主義の自覚を高め、幹部との関係も日ましに親密かつ融和なものとなつた。もともと宗教政策に疑いをいだいたり、また、バチカンからの悪い影響を受けて愛国愛教・独立自主・自弁教会という考えに對して懸念をもち、教堂へ行つて正常な宗教活動に参加することを願わなかつた教徒も、つぎつぎに疑いと懸念をなくし、愛国会の活動に參加し、學習と會議に参加し、教会での正常な宗教活動に参加するようになつた。朱家角天主堂開放の後、毎年数回の天主教の大きな祝日に、教会にやつてくる人数は、二千から三千余の間で、余山への「聖地参拝」になると約四千名前後である。この論文の冒頭に実際の状態を記したように一九八三年五月一日、二千余名の青浦県の漁民教徒が余山に「聖地参拝」したが、補記すれば五月二日は第二

組目で、第一組は五月一日で千人近くあつたのである。青浦県の漁民教徒は正常なる宗教活動に参加しており、宗教上の祝日に教会へ行く人数は一九八〇年の一千余人から、一九八三年の約四千人前後にまで増加した。まさしくこれは、彼らが党と政府を中心に団結し、以前にはなかつた情熱で、祖国の四つの近代化の建設のため貢献していることを表わしている。

### 生活が好くなつてのち

青浦県の漁民教徒は旧社会では、圧倒的多数は下積みの人で、「漁化子」（漁師乞食）の名がついていた。それは春節になると、彼らはおおかたが上陸して人の家へ出むき「正月のもちをねだつた」からである。また「泥棒船」の名もあつた。漁民のある者は生活に困窮した時、上陸して田畠で野菜や南瓜をぬすんで飢えをみたしたからである。船には蓄えもなく、着ているものはボロで、いつも水上をただよっていた。漁船の娘は上陸して嫁にいくこともできず、若者も陸上の娘を妻とすることもできなかつた。農民も苦しかつたが、漁民はもっと苦しかつたのである。

解放後、漁民教徒も解放された。現在、ほとんどの漁民教徒は上陸して漁民新村に移つた。漁業養殖場の発展にともなつて、青浦県の漁民教徒がかなり集中している水産大隊では、条件をつけて労働力を抽出し、あるいは職のない青年を組織して、隊の経営する工業を発展させている。たとえば白鶴水産大隊の一部の漁民教徒は隊経営の皮鞋工場や小箱工場・砂利工場で働いている、ここ数年、すべての家で収入が増加している。銀行預金が千元以上の者も少なくない。自転車とミシンはおおよそいきわたつていて、テレビ・テープコーダーも多く家のにある。たとえば趙巷水産大隊では一九八一年、一回でテレビ二〇台を売つていて。彼らの生活は断えず改善向上しており、その喜びは「ゴマは一節一節咲き上る」の言葉どおりである。

解放以来、多くの切実な利益があがつたことに対し、青浦県の漁民教徒はこれが共産党の指導によるものであることを知つてゐる。生産が発展し、生活が好転したのは、共産党の恩情であることを彼らは憶えている。ただし、同時に彼らは自分が「世代教徒」であることも憶えており、人には「肉体」と「靈魂」があることを信じ、「靈魂」は「肉体」にあって、死後は、「天堂」に昇ることを信じている。「靈魂」や「天堂」の有無の問題について、虔誠な教徒は疑いを抱いておらず、彼らには「信」の字のみがある。旧社会にあつて、彼らの生活はとても苦しかつたから、一面では「来世の幸福」を願い、一面では「天主・ヤソ・聖母のたすけ」を求めた。今日、彼らの生活がよくなつてからも、依然として「来世の幸福」を願うのである。

解放後三〇余年このかた、人民の生活はよくなつてきてゐる。しかし教徒の見方からすると、彼らの信じる「靈魂」が「天堂」に昇るのがうまくいっているかどうかで判断する必要があるので、それがうまくいっているなら、彼らも本当にいと感じ、もしさうでないなら彼らはよくないと感じるどころか、彼らの信じる「靈魂」が、怕るべき「地獄」へ落ることを心配しだすのである。青浦県の漁民教徒は、解放後、「滅教」を心配してきた。教えが「滅びれば」他らの「靈魂」が「天上」へ昇るのはさまたげられるからである。「文化大革命」の中で「教難」は彼らの頭上にありかかり、彼らは表面上は宗教活動を行しなかつたが、実際はその信仰を保つていた。これもまた自己の靈魂が、信仰を放棄することで「天堂」に昇ることができなくならせないためである。「天堂」に昇ることが、彼らの人生の終極なのである。党の一二期三中全会の後、彼らは宗教信仰自由の政策が本当に貫徹されるのをみ、彼らは再び教会へ行つて「告解」「領聖体」を行うことができ、「靈魂」が「天堂」へ昇るのに妨げがなくなつて、彼らはようやく「心が安らぎ」本当の素晴しさを感じたのである。教徒は、生活の好きを「肉体のよさ」であるとみ、「靈魂」が「天堂」に昇るのを「靈魂のよさ」とみる。「肉体がよくなれば」「靈魂がよくなり」、「靈魂がよくなれば」「靈魂がよくなる」としては、これは社会主義という条件のもとの労働教徒の人々の新しい要求であり、また新しい特長でもある。「肉体がよくなれば」「靈魂がよくなる」とは、生活が向上しても、彼らが一生宗教活動のために教会に行かないことではなく、「靈魂がよくなれば」「肉体がよくなる」とは、「肉体のよさ」は生産をよくあげてから、正しい宗教活動に参加することで、絶対に生産には影響を与えることである。正常な宗教活動に参加して、生産に影響がないとは、畢竟可能なのであろうか。青浦県漁民教徒のこの数年来の実践は、可能であることを証明している。人々は青浦県の天主教愛国会が、会を開くたびに、必ず教徒に生産の向上を呼びかけていることを知つてゐる。毎回、大規模な宗教活動を行うとき、教徒はまず最初に生産に影響を与えない方法をいかにとるかを、ともに相談してゐる。現在、朱家角天主堂の、毎年の主たる活動としては「ヤソ聖誕」「ヤソ復活」を祝う一一つの大祝日と、五月の一回の佘山への「聖地参拝」がある。この数回の活動は、すべて指導者がいて組織的に進められ、放任され勝手にやられてはいるわけではない。生産単位に属している教徒は、すべてそれ以前の仕事の班にくりあげて入るという方法で、生産の任務を完成してから参加してゐる。こ二三年、彼らは年々、その生産任務を完成するか、目標を超えて完成してゐる。ある虔誠なる教徒は、魚やエビを捕える名人だが、彼は教会で宗教生活の要求を満足させた後に次のように言う、「生産にもっと頑張る」と。彼は率先して生産を向上さ

せ、不斷に漁労の技術を研鑽して、生産量は日ましに高まっている。

青浦県の漁民教徒は、身をもつて経験した事実から、生活が好くなつたことを知つてから、彼らの「靈魂」が将来「天堂」へ昇れるようになったとして、愛国愛教、独立自主、自弁教会の道を邁進している。現在の彼らは、かつての外国勢力が支配する教会に管理される「教民」ではない。過去の彼らは信教はバチカンの法皇の教えを聞くのみと思つていたが、現在は学習を通して多くの教徒が、法皇もまた俗人であること、天主を信じても、バチカンを信じないことが、とりもなおさず彼らの純粹な宗教信仰であることを知つている。国外の宗教方面の敵対勢力の滲透に対し、また他の人が宗教を利用して違法活動をするのに対し、彼らは警戒感を持ち続けている。過去、彼らは党と政府に歩みよろうとはしなかつたが、現在では教徒は中國人民の一部であり、党の指導を擁護すべきであり、政府に従うべきであり、國を愛し、法を守るべきを認識している。たとえば趙巷大隊のある教徒は言う、「党と政府が教会を開放したので、私の靈魂も平安となつた。解放後、生活の上で大変化があり、家にはソファーやテレビが入つた。今後は靈魂のことは天主にゆだね、肉体の上でのことは人民政府にまかせよう。そして四つの現代化建設のために、自分の力を献げ、一人の愛国愛教の教徒になる」と。「肉体の上でのことは人民政府にまかせる」、これは青浦県の漁民教徒の政治思想の大いなる向上のあらわれである。

人民の中には信仰するものも、しないものもある。信仰と不信仰とは、一種の思想の上での差である。しかし思想上の差は決して團結の障害とはならない。今日の青浦県の漁民教徒は、主として、幼いときから、信仰して虔誠に宗教信仰を保つてゐるほか、彼らは社会主義の祖国を愛し、また積極的に労働し、仕事に努力して生産任務を完成したり、目標を超えて完成して、社会主義の四つの現代化の建設に貢献している。これに対して人々は、新たなる眼ざしで報い、新たなる評価を与えてなくてはならない。

### ここ三年間に新たに入信した教徒

本論で述べたのは、主として今日の青浦県の六〇歳以上と四〇歳以上の老中年の教徒についてである。四〇以下、一八歳以上の子女の宗教信仰は、彼らとはまったく同じものではない。一九五五年、天主教内の反革命分子を肅清する前に生れた漁民家庭の子供は、父母と同じように、生まれるとすぐに「付洗」して信仰に入ったが、しかし、彼らは「読經班」に進むことは

なかつた。

それ以後、生まれた子は、ある者は、洗礼を受けることもなく、ある者は「権付」を受けるだけであった。この五〇年代と六〇年代初期に生まれた子供は、現在は三〇余から二〇余歳の青年であるが、彼らにはおおよそ二つの情況に分けられる。一つは彼らの父母がひそかに聖書を教えることができた人たちであり、一つは「聖書」を学ぶことがなかつたという人たちである。

朱家角天主堂の開放の後、彼らの中、以前に「権付」を受けた者は教会で神父の「補礼」を受けて、正式に新教徒となつた。また「権付」を受けていないが、家庭で少し天主教の「道理」を知つてゐる者も、教会で洗礼を受けて新教徒となつた。ここ三年で、このように教会で神父の「補礼」や「洗礼」を受けて教徒となつたものは一五〇人にのぼる。これらの新教徒は天主教の「道理」について知るところは多くなく、ある者は理解できぬと思っている。彼らの中のある人の言うところでは、彼らが受洗入教を希望したのは、家庭、特に母親の影響によるが、同時に、彼らは天主教の「十誡」を人に惡を戒め善をなさせるよいものであり、入信したら「十誡」を守つて善を行なわねばならないとしている。これら新教徒が宗教生活に求めるものは、彼らの父母の強烈なそれに遠く及ばない。毎夜、老中年の漁民教徒は家で「晚課」を行なうが、それは全部を念じるものである。しかしこれら年若い新教徒は、このような長い時間は不要ではないかと思っている。家中がともに念経する時、若い教徒がしばらくの間みえないこともある。特にテレビに面白い番組があるときは、彼らは念経に気が入らない。一年の内、彼らが主として参加するのは「ヤソ聖誕」「ヤソ復活」、佘山の「聖地参拝日」の宗教活動である。これら数回の活動によつて、彼らは興味を持つようになり、いくつかの仕事、特に贊美歌を唱うなどは、主として彼らの受け持ちとなつてゐる。

ここ三年の新教徒の情況をみると、青浦県の漁民教徒の信仰の虔誠な状況にも変化が生じてゐる。以前の漁民教徒の家庭はどこでも、家中がともに「念経」し、ともに教会へ行つて宗教活動に参加した。しかし現在、一軒の家庭において、あるものは宗教生活を送つても、ある者は別のことをしてゐるといふことが、少なからずある。このような趨勢からみると、このような情況は将来、もっと多く出現するであらう。

中国天主教の教徒は現在、約三百万人以上がいて、全国各地に分布してゐるが、その情況は各おの異つてゐる。其の中で青

浦県労働漁民教徒のような「世代教徒」は、解放前からの天主教の歴史からみると、その数は少くない。このような「世代教徒」は、虔誠に彼らの宗教信仰を保ち、社会主義建設に対しても有益な積極的作用となつておらず、まさしくそれは青浦県の漁民教徒がすでにそのようになつてることに象徴される。彼らに対して、重要なのは本当に宗教信仰自由の政策を貫徹し、肝胆相い照し、教育と、団結工作をすることであり、他らを現実生活の中で、社会主義社会にあることを自覚させることであり、彼らは「肉身好」なら又「靈魂好」なので、愛国愛教を動力として、社会主義社会建設に貢献するようしむることである。

△訳者補注△訳文中、特に「長白山麓の教会」と「青浦県の漁民教徒の信仰情況初探」の項で記される中国キリスト教の三自愛国運動について述べておく。三自とは自治（政治的自立）、自養（経済的自立）、自伝（布教上の自立）をいう。もとは中国のキリスト教を外国のそれから独立させ、中国固有の教会とする運動であったという（『アジア歴史事典』卷四、p.88）。ただし訳文中で中心となるのは、解放後、呉耀宗（一八九三—一九七九）が中心となつて一九五〇年七月にキリスト教界が発表した「中国基督教在新中國建設中努力的途径」に述べられる、キリスト教会が帝国主義、封建主義、官僚資本主義に反対し、独立、民主、和平、統一の立場を促進していくとする運動である。この運動は朝鮮戦争に際してより一層の高まりを見せ、中国キリスト教界は「聯合宣言」によって、抗美援朝の運動をくり広げた。一九五四年、呉耀宗は第一回中国キリスト教全国会議で成立した中国基督教三自愛国運動委員会の主席に選出され、また席上、三自運動の推進が確認された。この結果、各地に委員会が設立され、爾来、中国キリスト教会は派の別を問わず、中国人自身による布教、管理に帰することとなり、教義の面でも中国独自の道が歩まれることとなつた。以上、主として『中国大百科全書』宗教（一九八八年、同書出版社）の記述による。